

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第10回)

マイケル・フレインの『コペンハーゲン』

三軒茶屋のシアタートラムでマイケル・フレインの戯曲『コペンハーゲン』が拙訳で上演された。二人のノーベル賞物理学者ニルス・ボーアとヴェルナー・ハイゼンベルクとボーアの妻マルグレートだけが登場する三人芝居である。

「でも、どうして?」「まだ気にしてるのか? どうでもいいじゃないか、我々は三人とももう死んだのだから」という夫婦の不思議な会話で始まるこの芝居は、1941年、ナチスの支配下にあったデンマーク、コペンハーゲンのボーアのもとを、かつての弟子のドイツ人ハイゼンベルクがなぜ訪れたのか、二人の間でどんな会話が交わされたのか、という歴史上の謎に迫る物語だ。その内容次第ではもしかしたらドイツが先に原子爆弾を開発していたかもしれない、そうすると人類の歴史も変わっていたかもしれない、という重大な問題なのだが、もちろん正解はわからない。当事者たちですらわからない。ただこうだったかもしれない、ああだったかもしれないという可能性を示すだけである。それを理論物理学の「思考実験」のように「私がこうする」「彼がこう言う」と現在形で実演していき、行き詰まると「また初めからやってみよう」と別の可能性を提示していく。

この二人のやりとり自体が、例えばある物体の位置と運動量など二つの物理量は同時に確定することはできないとするハイゼンベルクの「不確定性原理」や、例えば物理現象を波動としてとらえることと粒子としてとらえることなど、対立する二つの要素は相補的であるとするボーアの「相補性理論」など、二人の確立した量子物理学の理論の隠喩となっている。さらに、物理的な存在は観測者が観測することで初めて確定する、という量子物理学の考え方をマルグレートの存在が体現している。つまり、劇の構造そのものが知的な、壮大なシャレなのだ。さすが、シャレの名士シェイクスピアの流れを汲むイギリス演劇の担い手である。

フレインはドタバタ喜劇『ノイゼズ・オフ』で舞台の表で起こっていることと裏で起こっていることを同時に見せたように、常に「表と裏」というモチーフにこだわっている。『コペンハーゲン』でも、歴史の表と裏、人の心の表と裏、原子核の表と裏など、さまざまな表と裏を追求している。なるほど、本音と建前を使い分ける、口で言っていることと腹で思っていることが違うとよく言われるイギリス人にはそこがピンとくるのだろう。